©へるす出版

特集

子どもによくみられる症状

－観察のポイントと看護の実際－

【特集にあたって】

小児看護をより身近に感じられるように

筆者が現在勤務しているNICU・GCU病棟では，生まれて間もない新生児の看護と同時に，新米ママに対し，おむつ交換から授乳・沐浴の方法など一般的な育児指導も行います。指導をする際はまず，対象者のスキルを計り，相手があらかじめもっている知識や技術を補うかたちで説明するように心がけています。初産婦の場合，子ども，とくに新生児に対峙した経験はほぼ皆無であるため，おむつ交換一つにしても，まずはおむつの広げ方から説明することも少なくありません。

しかし，その日に対応した20歳の新米ママは違っていました。初めてのはずなのに，説明を受けることもなく慣れた手つきでおむつを替え，まだ首の座らないわが子をじょうずに抱き上げていました。その新米ママには年の離れた妹がおり，小さいころはよくおむつを替えてあげるなど，母親の育児を手伝った経験があるとのことでした。

かつてのわが国では大家族で生活していました。筆者の父親も５男３女の末っ子で，小さいころ，姉がおぶって近所の子どもたちと遊びに行っていた，けがをしたときに兄が病院に連れて行ってくれたなどの話を聞いたことがあります。その時代，子育ては生活のなかに自然と存在するものであり，その体験を活かしながら父親や母親となっていきました。子どもが体調を崩すことがあっても一緒に暮らす祖父母や隣人の先輩ママたちが知恵を出し合い支え合っていたため，子どもの対応に大きな不安を抱くことは少なかったのではないかと思います。

しかし近年では，少子化・核家族化が進み，かつてのように日常生活のなかで育児を体験する機会は少なくなってしまいました。そのため，子どもの体調が少しでも崩れるとその対応に苦慮し，子どもの重症度にかかわらず不安を抱えて医療機関を受診する家族が多くなりました。そして，子どもに関する経験が少ないのは受診する患者側だけではありません。「子どもはよくわからないから苦手」という声は医療者側からも多く聞かれます。逆に小児領域で長く働く人のなかには，「子どもはがまんしない。痛ければ素直に痛がるし，具合が悪ければ遊びもしないから逆にわかりやすい」と言う人もいます。この違いは，小児医療を専門として学習してきたというだけでなく，多くの子どもに対応するなかで，たくさんの異常・正常を体験してきたからなのだと筆者は思っています。

本特集では，小児看護のなかでよく経験する症状をあげ，子どもの特徴や緊急度判定，家族への対応方法など，より実践的に提示できるように配慮しました。そのため，各医療機関の臨床で活躍する小児救急看護認定看護師に執筆を依頼しています。多くの子どもたちと接することで培われた小児救急看護認定看護師の知識と技術を紹介することで，外来や病棟で慣れない子どもの対応に苦慮している看護師やこれから小児看護を学ぼうとしている人たちが，少しでも小児看護への理解を深めることができれば幸いです。

川崎市立川崎病院8階西病棟主任看護師
／小児救急看護認定看護師
臼田美奈子 Usuda Minako